プラマーナヴァールッティカ・プラマーナシッディ章について

木　村　俊　彦

<使用文献目録>

(イ) Dharmakīrti : Pramāṇavārttika-Kārikā, The Journal of the Bihar and Orissa Research Society Vol. 24 Pts. 1-2, Patna 1938
デルゲ版チベット大蔵経・東北帝大目録 No. 4210 (tshad-ma rnam-ḥgrel-gyi tshig-leḥur-byas-pa)

(ロ) Dignāga : デルゲ版チベット大蔵経・東北帝大目録 No. 4204 (tshad-ma kun-las-btus-paḥi ḥgrel-pa, Pramāṇasamuccaya-Vṛtti)

(ハ) Devendrabuddhi : デルゲ版チベット大蔵経・東北帝大目録 No. 4217 (tshad-ma rnam-ḥgrel-gyi dkaḥ-ḥgrel, Pramāṇavārttika-Pañjikā)

(ニ) Prajñākaragupta : Pramāṇavārttika-Bhāṣya, Tibetan Sanskrit Work Series Vol. 1, Patna 1953
デルゲ版チベット大蔵経・東北帝大目録 No. 4221 (tshad-ma rnam-ḥgrel-gyi rgyan, Pramāṇavārttika-Alaṅkāra)

(ホ) Manorathanandin : Pramāṇavārttika-Vṛtti, The Journal of the Bihar and Orissa Research Society Vol. 24 pt. 3-Vol, 26 pt. 3, Patna 1938-1940

(ヘ) Vibhūticandra : Vṛtti-Pariśiṣṭa, The Journal of the Bihar and Orissa Research Society Vol. 26 pt. 3, Patna 1940

(註) (ハ), (ニ), (ホ), (ヘ)を各々D註, P疏, M釈, V付記と略称する。

(I)

法称 (Dharmakīrti) の主著<プラマーナヴァールッティカ>のうちプラマーナシッディ章は，陳那 (Dignāga) の<集量論> (Pramāṇasamuccaya) の帰敬偈(namaskāraśloka)を評釈したものであることが伝えられている。

例えば，M釈に依れば「この師〔法称〕は，大師〔陳那〕の<集量論>に対して評釈を作らんと欲され，(法称)自ら　世尊への帰敬偈を作った後，(陳那師が) かの論書〔<集量論>〕を始めるに際してその師の作られた世尊への帰敬偈を解説せんと欲され，最初に量の一般的定義を曰く‥‥」[1]

として，プラマーナシッディ章の最初の句，<pramāṇam avisaṃvādijñānam>を引用する。

M釈はこの章を第一章としたが，D註はこれに反し，自註の加えられている自比量章を第一章に置き，法称の自註を継続する形で始められている。即ち，「師〔陳那〕による量の定義の論書を解説する基礎たる比量を安立した後，時来たって<pramāṇam>云々によって帰敬偈の解説を始められる。<pramāṇabhūta>とは，『量として，生まれたかた』ということ。量と等しいゆえに，世尊即ち量である」[2] 云々という導入文である。

P疏がD註同様，自比量章を除いた余の三章にのみ註釈を加えたものである他，M釈を書写した Vibhūticandra が，自比量章を冒頭に置いて「前後の章を結合する Devendrabuddhi 師」[3] を擁護して，先のD註の導入文について次のように付記していることからも，M釈の章次第はさほど支持されるものではなかったと見られる。

「『師』とはここでは陳那である。彼によって，量の定義の論書，すなわち現量と比量の自性を顕わす<集量論>と名付くるものが著わされた。‥‥そして<評釈>なる別の様式によって，(<集量論>に対する) 過去の註釈作者の誤まった解説と外道の異解とを破斥して，如実の解説をされる。その(解説の) 基礎は比量であって，現量ではない。」[4]

M釈を書写しているVibhūti. が，このようにあらためてD註を擁護しい

ている。Vibhūti. は Vikramaśilā 寺最後の主座 Śākyaśrībhadra の弟子であるから[5]，自比量章を第一章に置くことが伝統説であると見られる。

更にV付記を援引すると，プラマーナシッディ章は，「解説されるべき，かの帰敬偈の(前)半が，第二章として解説される」[6] ものである。「かの帰敬偈」すなわち<集量論>の帰敬偈は，前半が Yaśomitra の <Sphuṭārthābhidharmakośavyākhyā> (Bibliotheca Buddhica Vol. 1 pt. 1 7, 19-20) や，P疏 (3, 2) などに引用されているが，全偈を Vibhūti. が紹介している。[7] 次の如し。

"pramāṇabhūtāya jagaddhitaiṣiṇe praṇamya śāstre sugatāya tāyine / pramāṇasiddhyai svamatāt samuccayaḥ kariṣyate viprasṛtād ihaikataḥ //"[8]

このうち，<pramāṇasiddhyai>とは，V付記によれば，<pramāṇavyutpattaye> のことであるが[9]，<プラマーナヴァールッティカ>第二章の<Pramāṇasiddhi>なる章名も，これより採られたものと見られる。

すなわちV付記は次の如く釈する。

「この偈は『量』なる言葉で始まるから，世尊の量性を立証するものであり，順次および逆次に知るべきである。世尊は量 (pramāṇa) である。衆生の利益を願う人 (jagaddhitaiṣin) であるから。衆生の利益を願う人であるから教師 (śāstṛ) である。教師であるから……善逝 (sugata) である。善逝であるから，一切の衆生を救済する人 (sarvajagattrāyaka) である。だからこのかたは量である，というのが順次の説明である。

他方，逆次（の説明）によれば，（世尊は）量である。救済者であるから。善逝であるから救済者である。そしてそれは教師であるから。而してこのことは，衆生の利益を願うかたであるから。果(位)から因(位)を比量するから，逆次の説明である。そこで，この偈の前半における<praṇamya>というこの（句）を除いた五句が，その章として解説される。余は解し易いから，（解説され）ない。」[10]

然るに，陳那自身はこの帰敬偈に対して，次のように自註している。

「因果円満なるゆえに，量として生まれたかたとして，世尊に讃頌が述べられる。敬信を生ぜんがためなり。そのうち因とは，意楽と加行の円満である。意楽とは，衆生の利益を願うかたであること。加行とは，衆生を教誡する（ゆえに）教師であること。自利とは，善逝であることで，三義をとり，(イ) 美女の如く称讃されるかたであること，(ロ) 熱病の完治せる如く不退転なること，(ハ) 満杯の瓶の如く無余なることである。この三義は外道の離欲者と有学と無学の者達から，自利円満なることを区別せんがためである。利他円満とは，済度の意味としての救済である。そのような徳を持つ教師に帰命して‥‥。」(11)

すなわち，陳那によれば，＜量として生まれたかた (pramāṇabhūta)＞とは，意楽(āśaya)と，加行(prayoga)の円満なる＜jagaddhitaiṣitva＞＜śāstṛtva＞——因円満——，及び自利・利他の円満なる＜sugatatva＞＜tāyitya＞——果円満——によって理解される世尊の徳 (guṇa)である。

然るに，このような＜集量論＞帰敬偈および自註に対して，法称は如何なる評釈を施し，如何なる理論展開を見せているか，以下において＜プラマーナヴァールッティカ＞のプラマーナシッディ章を概観し，その体系を把握したい。

註

(1) Vṛtti 3, 8-10（M釈3頁，8-10行。以下これに準ずる。行数には，テキスト編集者の挿入せる表題を含めていない。）

(2) Pañjikā T 1a, 1-3（D註チベット訳デルゲ版・帙中1枚目表1-3行。以下これに順ずる。）

(3) Vṛtti-Pariśiṣṭa 516, 29

(4) ibid. 517, 3-6

(5) Vibhūticandra は，その師 Śākyaśrībhadra に従って，1204年チベットに入っ

た9人の小パンディタのひとり。羽田野伯猷先生：<Kāśmīra-mahāpaṇḍita "Śākyaśrībhadra">＜文化＞第21巻5号　参照。

(6) Vṛtti-Pariśiṣṭa 516, 1–2

(7) ibid. 518, 26–27

(8) Pramāṇasamuccaya-Vṛtti T 訳中の帰敬偈は，次の如し。

/ tshad-mar gyur-pa ḥgro-la phan-par byed // ston-pa bde-gśegs skyob-la phyag-ḥtshal-nas // tshad-mar sgrub-phyir raṅ-gi gźuṅ-kun-las // btus-te sna-tshogs ḥthor-rnams ḥdir gcig-bya / (14b, 1–2)

(9) Vṛtti-Pariśiṣṭa 520, 31

(10) ibid. 521, 5–13

(11) Pramāṇasamuccaya-Vṛtti T 14b, 2–5

尚，このうち3分の2程が，P疏 3, 8–14 中に引用されている。和訳中，括孤内の語は，チベット訳 sbyor-ba-ni ḥgro-ba-la bstan-pa ston-paḥo / を，P疏の引用文 prayogo jagacchāsanāt śāstṛtvam / によって補正したもの。

(II)

＜プラマーナヴァールッティカ＞・プラマーナシッディ章の第1偈中，冒頭の＜pramāṇam avisaṃvādijñānam (tshad-ma bslu-med-can śes-pa)＞は，＜集量論＞帰敬偈冒頭の句，＜pramāṇabhūtāya＞の＜pramāṇa＞について評釈したものである。以下＜量＞に対する一般的定義が続き，第7偈に到って，＜tadvat pramāṇam bhagavān (de-ldan bcom-ldan tshad-ma-ñid)＞として，世尊即量説を提示する。＜pramāṇa-siddhi(量の証明)＞とは，世尊が量であることの証明であって，この文が本章の内容を明示している。

次に＜bhūta＞について，abhūtanivṛttaye bhūtoktiḥ (ma-skyes-pa-ni bzlog-don-du gyur-pa-ñid gsuṅs)＝不生〔常住〕を否定するために，《bhūta》と説かれた＞と評釈する[1]。元来は，たとえば＜Lalitavistara＞や＜Yuktidīpikā＞などで用いられる場合[2]，＜量として在るかた＞の意であろう。然るに，法称が如上の語義解釈を施したのは，次のような論理に依る。＜bhūta＞を，＜jāta＞，＜anitya＞なるものと解釈することによって，

常住なる神を量とすることがすでに否定される。また量の意義から言っても，所量の無常性によって量も無常となるべきであるし，量果なる知が次第生(kramajanman)であることからも，量は無常であるべきだ，と。[3]

次に，具体的には，量たる世尊の智は四聖諦として現われているとする。「それゆえ，随順されるべき，(輪廻の苦しみを鎮める方策)の存在する　この（量たる世尊の）智が伺察されるべきである。虫の数まで遍知する，かの（声量による超感官智）は，我々にとって何の用ぞ。」(Kārikā 31)[4]

「方策を伴える，捨てるべき（および）採るべき（苦諦集諦と滅諦道諦）を知らしめる，かの人〔世尊〕が量であると認められるが，一切を知らしめる人(は，量)ではない。」(Kārikā 32)[5]

「遠方を見ても見なくても，極成の実相〔四聖諦〕を見悟される限り，(世尊は量である)。遠方を見る者が量であるとするならば，来なさい。(遠方を見る）鷲に近侍しよう。」(Kārikā 33)[6]

四聖諦を見悟し教示されることによって，世尊は量であるのだと説き，バラモン系学派の説く「聖言量」なるものは，苦より解脱せんと願う有情にとって無用の代物だとし，敵者を揶揄した第33偈で，＜pramāṇabhūta＞についての評釈が終る。

次に，そのような世尊の量性を「立証するものは慈悲である」(sādhanaṃ karuṇā‥‥/ sgrub byed thugs-rje‥‥) (Kārikā 34a) とする。＜慈悲＞とは＜衆生の利を願うこと＞であり[7]，Vibhūticandra が指摘した如く，＜jagaddhitaiṣitva＞によって＜pramāṇabhūtatva＞を推知せしめんとする。

そして＜慈悲＞なる心の徳を顕現せしめるものは修習 (abhyāsa) であるとし，心識は身体の消滅には影響されずに存続するという心相続説によって，修習は可能であることを論証する。従ってここでの直接の論敵は Lokāyata となる[8]。この＜jagaddhitaiṣitva＞の評釈の節では，(イ) 心相続説を説いて，修習が決して有限の身体の滅亡によっては断絶されないとして　その果

を保証し（第34–119偈），(ロ) 修習によって，元来心の中に種子としてあった慈悲，離欲，覚り等の徳が顕現することを説く。（第120–131a 偈）

第 131 偈後半より，＜śāstṛtva＞の評釈に入る。[9]

「慈悲を増大しおえて，他者の苦に耐え得ずして発心せる，慈悲を持てる人は，苦を捨てしめんがために方便に努める。」(Kārikā 131b, 132a)[10] そこで，苦の因たる我と我所への愛着を知り苦滅の因たる無我見（nairātmyadarśana）の修習によって，渇愛の薫習を捨てしめるべく導びく。その śāsana について「教誡とは，それ〔方便修習〕を目的とするから，まさに方便修習と考える」[11] と評釈する。苦を除去する方便を苦滅の因すなわち無我見の修習に見ており，＜śāsana＞を四聖諦の構造において把握している。

この節を第138偈で了え，第139偈において，陳那の自註を踏まえて＜sugatatva＞の評釈に移る。

「（＜jagaddhitaiṣitva＞と＜śāstṛtva＞を）成就した後，はじめて（＜sugatatva＞で）あるから，この二者が因であると，（陳那師によって）説かれた。（苦の）因（たる渇愛）の厭離が，三徳ある善逝たることである。）」[12]

前半偈は，＜集量論＞帰敬偈自註において，"tatra hetur āśayaprayogasampad" と規定したことを指している。後半偈も，陳那が自註において，善逝の三義として，＜praśastatva＞と＜apunarāvṛtti＞と＜niḥśeṣa＞を挙げたことに関わる[13]。この三徳について，法称は次のように評釈する。

「苦に依住せざるゆえに，また無我見　或は（その）実践のゆえに，（善逝は）称讃されるかたである。

（次に，生と過失の生起は，再び退転することと説かれる。（而るに善逝は，第二の徳として），我見の種子を捨てるゆえに，再び来たることはない。それ〔我見〕は（無我なる）真実と逆の性質であるから。

更に，（＜niḥśeṣatā＞の）＜śeṣa＞とは，煩悩なく，熱病治まれる（とも），身口意（の業）に欠陥あり，道を説いても不明確であること。修習によって（そのようなものを）余りなく捨てる（から，善逝は第三の徳として，＜無余

なる人>と言われる)。」(Kārikā 139b, 142)[14]

<苦に依住する>とは，M釈によれば「我見者は我に愛著して，その苦を捨て，楽を得んと欲することによって，苦の相ある生を執るからである。」[15]

また<不退転>については，P疏が次のように解説する。

「生と過失の生起とは，すなわち再び退転することである。貪欲等の無なるゆえの無過失の状態と，不再生のゆえの生の無は，解脱の城都に逝くことだ。過失と生が有であれば，再び退転するものと言われる。我見の無からは，それらの過失は再びは生じない。)」[16]

<道を説いても不明確>とは，P疏によれば「煩悩なく，熱病より冷めても，習気だけは残っているから，賤女の言葉の如く，道の種々の説示が不明確なことである。」[17]

異見への反論を含めて，第145偈前半でこの節を終え，後半から<tāyitva>の評釈に入る。

「<救済>とは，御自分の見悟された道を説くことである。虚妄は無意味だから語られない。慈悲によって，また他者のために，(苦滅の方便)すべてをなすことに努められるゆえに，それゆえに（世尊は）量である。或はまた（換言すれば），<救済>とは，四(聖)諦を顕らかにされることである。」[18]

D註によれば，「世尊は有情に対して，輪廻の苦を滅する因たる四聖諦を示される。かくすれば，苦を鎮めんと欲する者にとって，彼は量である」と総括される。[19]

<tāyitva>は，陳那によっては利他円満とのみ釈されるが，この評釈では，道(mārga)を説くこと，すなわち　苦滅の因を説示することで，D註を援引すれば，結局　四聖諦（caturāryasatya）を教示することとなる。苦滅の因を修習することによって苦が鎮められることから，苦海に沈む衆生にとって　世尊が量となる。

そこで第281偈前半まで，四聖諦について詳論される。

註

(1) <bhūta>の解釈について，次のM註，V付記を参照。

bhūtaśabdanirdeśo' bhūtasya nityasya nivṛttyarthaṃ nityam pramāṇaṃ nāstītyarthaḥ / (Vṛtti 10, 1)

ajātatvanivṛttyarthaṃ jātatvoktam / (ibid. fn. 9)

(2) api tu bhagavaṃs tvam eva sadevakasya lokasya paramasākṣībhūtaḥ pramāṇabhūtaś ceti /

(<Lalitavistara>Lefmann ed. 319, 8–9)

āptavacanaṃ tu pramāṇabhūta-dvārako' tyantaparokṣe 'rthe niścayaḥ /

(<Yuktidīpikā>Pandeya ed. 31, 20–21)

(3) 次のヴァールッティカに依る。

pramāṇam naivāsti prāmāṇyād vastusaṅgateḥ /

jñeyānityatayā adhrauvyāt kramajanmanaḥ //

nityād utpattiviśleṣād apekṣayā ayogataḥ /

kathañcinnopakāryatvād anitye' pyapramāṇatā //

(tshad-ma rtag-pa-ñid yod min / dṅos yod rtogs-pa tshad phyir daṇ / śes-bya mi rtag-pa-ñid-kyis / de ni mi brtan-ñid phyir ro / rim-bźin skye-ba-can dag ni / rtag-las skye-ba mi ḥtshad phyir / ltos-pa mi ruṅ-ba-yi phir / rn am-ḥgas phan-gdags-bya min phyir / mi-rtag na yaṅ tshad-med-ñid /)

(Kārikā 8–9)

(4) tasmād anuṣṭheyagataṃ jñānam asya vicāryatām /

kīṭasaṃkhyāparijñānam tasya naḥ kvopayujyate //

(de phyir de yin bsgrub-bya-du / gyur-baḥi ye-āes rnam-dpyad-byaḥi / de-yi srin-buḥi graṅs mkhyen-pa / ṅed-la ḥgar yaṅ ñer-mkho-med /) (Kārikā 31) 尚，Kārikā T 訳より Bhāṣya T 45b, 2 中の訳の方が解し易い。

(de phyir de-yi ye-śes ni / nan-tan-bya rtogs rnam-dpyad-byaḥi / de-yi srin-buḥi graṅs mkyen-pa / ṅed-la ḥgar yaṅ ñer-mkho-med /)

この偈の解釈については，次のM釈を参照。

duḥkhopaśamopāyopadeṣṭur jñānam mṛgyate yatastasmād anuṣṭheyagataṃ saṃsāraduḥkhapraśamopāyaṃ jñānam asya pramāṇapuruṣasya vicāryatām /

(Vṛtti 20, 14–15)

(5) heyopādeyatattvasya sābhyupāyasya vedakaḥ /

yaḥ pramāṇam asāviṣṭo na tu sarvasya vedakaḥ //

(blaṅ daṅ dor-byaḥi de-ñid ni / thabs-daṅ-bcas-pa rigs mdsad-pa / gaṅ de

tshad-ma-ñid ḥdod kyi / thams-cad rigs-mdsad ma yin no /) (Kārikā 32)

(6) dūram paśyatu vā mā vā tattvam iṣṭaṃ tu paśyatu /
pramāṇaṃ dūradarśī ced eta gṛdhrān upāsmahe //
(riṅ-po mthoṅ-paḥam min yaṅ run / ḥdod-paḥi de-ñid mthoṅ-pa yin / gal-te riṅ mthoṅ tshad yin na / tshur śog bya-rgod bsten-gar gyis/)(Kārika 33)

(7) dayā tataḥ parārthatantratvam (de-las brtse yin gźan don ṅor)(Kāriā 282b-283a) ならびに dayayā jagaddhitaiṣitvena (Vṛtti 107, 23) を参照。

(8) kuto janmāntrāṇi kathaṃ vā teṣvabhyāsaḥ kṛpāder iti Cārvākāḥ/ (Vṛtti 21, 18–19) を参照。

(9) śāstṛtvavyākhyānāya ……āha (Vṛtti 56, 17)

(10) niṣpannakaruṇotkarṣaḥ paraduḥkhakṣameritaḥ /
dayāvān duḥkhahānārtham upāyeṣabhiyujyate //
(thugs-rje phul-byuṅ grub ḥgyur te / gzan sdug mi bjod-pas bskul-baḥi / brtse-ldan sdug-bsṅal gźom-paḥi phyir / thabs-rnams-la ni mṅon-sbyor mds-ad /) (Kārikā 131b, 132a)
但し，Kārikā T 訳には前半二句は欠けており Bhāṣya T 訳より補なった。

(11) upāyābhyāsa evāyaṃ tādarthyācchāsanam matam /
(de don phyir na thabs goms-pa / de-ñid ston-pa yin-par ḥdod)(Kārikā 138b)

(12) niṣpatteḥ prathamam bhāvāddhetur uktam idaṃ dvayam /
hetoḥ prahāṇam triguṇaṃ sugatatvam……//
(grub-las daṅ-po ḥbyuṅ-baḥi phyir/gñis-po ḥdi ni rgyu-ru bṣad / rgyu spaṅ s yon-tan gsum bde-gśegs / ñid yin……/) (Kārikā 139)

(13) Pañjikā T 57b, 2–3 Vṛtti 59, 2–3 の他，次のP疏を参照。
hetur uktam idaṃ dvayaṃ / tatra hetur āṣayaprayogasampad / āśayo jagaddhitaiṣitā / prayogo jagacchāsanācchāstṛtvam / (Bhāṣya 116, 5–6 T 108a, 6–7)
尚，この部分の<集量論>自註をP疏が引用している。
phalaṃ svaparārthasampat / svārthasampat sugatatvena trividham artham upādāya praśastatvaṃ surūpavad apunarāvṛttyarthaṃ sunaṣṭajvaravanniḥśe-ṣārthaṃ supūrṇaghaṭavat / (Bhāṣya 3, 11–13)
尚，Bhāṣya 本 svarūpavat を Bhāṣya T 1b, 2 gzugs bzaṅ ba bźin no によって，surūpavat と訂正。

(14) ……aniśrayāt //
duhkhasya śastam nairātmyadṛṣṭeśca yuktito' pi vā /

punarāvṛttir ityuktau janmadoṣasamudbhavau //
ātmadarśanabījasya hānād apunarāgamaḥ /
tadbhūtabhinnātmatayā śeṣam akleśanirjvaram //
kāyavāgbuddhivaiguṇyam mārgoktyapaṭutāpi vā /
aśeṣahānam abhyāsād……//
(……sdug-bsṅal rten min phyir / legs yin de ni bdag-med-pa / mthoṅ-baḥam sbyor-ba-las yin no / skye daṅ skyon ni kun-ḥbyuṅ-dag / slar-yaṅ-ldog ces bśad-pa yin / bdag ltaḥi sa-bon spaṅs-paḥi phyir / slar-mi-gśegs-pa-ñid yin no / de bden tha-dad bdag-ñid-kyis / lus ṅag sems-kyi gnas ṅan len / ñon-moṅs-med daṅ nad-med daṅ / lam bśad mi-gsal-ñid lus yin / goms phyir ma-lus spaṅs-pa-ñid / ……) (Kārikā 139b–142)

(15) Vṛtti 59, 10–11

(16) Bhāṣya 116, 22–24 T 108b, 7–109a, 1

(17) ibid. 117, 8–9 T 109b, 1–2

(18) tāyaḥ svadṛṣṭamārgoktir vaiphalyād vakti nānṛtam //
dayālutvāt parārthaṃ ca sarvārambhābhiyogataḥ /
tasmāt pramāṇaṃ tāyo vā catuḥsatyaprakāśanam //
(skyob-pa-ñid gzigs lam gsuṅs-pa / ḥbras-med phyir na brdsun mi gsuṅ / thugs-brtse-ldan phyir rtsom-kun yaṅ / gźan-gyi don-du sbyor phyir ro / de phyir tshad yin yaṅ na skyob / bden pa bźi ni ston mdsad paḥo /)
(Kārikā 145b, 146)

(19) Pañjikā T 61b, 7–62a, 2

(Ⅲ)

第 281 偈後半から総括に入る。

「救済によって，真実，堅固，無余の殊勝智が証明される。(<sugata> の動詞語根) √gam は覚る意味であるから。それゆえ（世尊は）外道，有学，無学を超えるかたである。」(Kārikā 281b, 282a)[1]

これより，V付記が "bhagavatprāmāṇyasādhako 'nulomapratilomato jñeyaḥ" と言ったうちの pratiloma による評釈がなされる。すなわち世尊の量性〔権証性〕は，世尊のかの四つの徳性を逆に辿ってゆくことによって

推知できる。すなわち，衆生を救済するから善逝たり得る。（以下，Ｐ疏を援引すれば）「そしてその善逝たることは，真実，堅固，無余の殊勝智である。真実智とは称讃される智，堅固なる智とは再び退転しない智である。堅固なるものは再び退転しないからである。無余の殊勝智とは一切相の智，余すことなき智である。ここでは √gam は覚る意味である。世尊にそれがあることは，救済によって知られる。他の者にこのような救済性はないからだ。（比量によって救済されるものならば）他の者にも，比量が働けば（善逝性が）ある筈だ。」(2)

真実，堅固，無余の殊勝智とは，陳那の言った＜praśastatva＞，＜apunarāvṛtti＞，＜niḥśeṣa＞なる，善逝の三徳を指していることが理解される。そして陳那が，「この三義は，外道の離欲者と有学と無学の者達から，自利円満なるを区別すべきだからである」と註釈した(3)ことを踏まえて，「外道，有学，無学を越えるかたである」と評釈した。以下，「四聖諦の説示を相とする果(円満)たる救済から」(4)，四徳を逆次に推知せしめる。

「それゆえ〔善逝であるゆえ〕，他者のために（殊勝）智に努められるということは，それを教説するということである。

それ〔教説〕から，慈悲が（証明される）。（すなわち）他者の利益を第一とすること，〔衆生の利益を願うかたであること〕である。目的（すなわち解脱）を成就した（善逝は，利他行を）放棄しないから，（果において，慈悲を有せられる如く，因においても慈悲を有せられることが推知できる）。」(Kārikā 282b, 283a)(5)

"siddhārthasyāvirāmataḥ" と Kārikā に言う場合，＜Siddhārtha＞は世尊の幼名とされるものでもあって，掛詞的用法か。M釈は次のように釈する。

「目的を成就した，すなわち解脱を達成した性質を持つ善逝は，サイの角（独覚）などの如くには利他行を放棄しない（すなわち）逃避しないから，果の在りかた〔sugatatva, tāyitva〕において，慈悲があるゆえ，因の在りか

た〔jagaddhitaiṣitva, śāstṛtva〕においても，それ〔慈悲〕の有であることが推知できる。」[6] 世尊の四つの徳性を貫ぬく原理は慈悲であるとされる。

次に，世尊の智慧によって明らかにされた四聖諦をその四徳に配当せしめて，世尊の権証性〔量性〕を結論する。

「(衆生の利益を願われる) 慈悲によって，最妙なる (四聖諦) を説かれ，(善逝なるゆえの殊勝)智によって，方便修習の伴える (四聖)諦を (説かれる)。

そしてその (四聖諦を) 説くことに努められるかたであるから，それゆえに (世尊は) 量である。」(Kārikā 283b, 284a)[7]

このようにして，世尊が慈悲と智慧の具現者であることを評釈した。慈悲と智慧によって衆生を苦より救済されることから，世尊の量なることが証明される。

最後に比量の面からも，世尊は円満であることを概論して，本章を終える。

「(世尊の) 教説の真実性への讃歌が，その (世尊の) 教説から，(陳那師によってなされた。世尊の教示が) 量の相を有することを証明せんがために。比量においても，障りなきゆえに。(Kārikā 284b, 285a)[8]

「或は，これ〔比量〕の論式提示が (阿含において) 見られるから。

(すなわち)『そも，生起を性質とするものは すべて消滅を法とするものである』など，種々ある。」(Kārikā 285b, 286a)[9]

ここに指摘された命題は，<Dīgha Nikāya> PTS ed. Vol. 1 110, 12–13 や<Majjhima Nikāya>PTS ed. Vol. 1 501, 7–8 などにおいて "yaṃ kiñci samudayadhammaṃ sabbaṃ taṃ nirodhadhamman ti" と，引用されるものである。これは比量式に適用すると，因〔因賓辞〕と所立〔宗賓辞〕の間の遍充関係を示すことになり[10] 形式論理学の大前提に相当する。

「(所立との) 必然的関係〔遍充関係〕を相とする因が，比量の所依である。因は所立との遍充関係を明示するゆえに。そしてその明析な (因) が，(世尊

によって）説かれた。」(Kārikā 286b, 287a)[11]

このように概観すると，プラマーナシッディ章は，世尊が量（pramāṇa）であることの証明（siddhi）が第一義となっていることが理解される。形式的には，陳那が＜集量論＞帰敬偈自註で述べた世尊の＜pramāṇabhūtatva＞と四つの徳性＜jagaddhitaiṣitva＞，＜śāstṛtva＞，＜sugatatva＞，＜tāyitva＞について評釈する形になっている。

そして世尊が量たることの証しとしてのこれら四つの徳性を，法称は，＜慈悲＞と＜智慧＞の徳目によって把え直している。衆生済度を願う慈悲の精神によって，そして四聖諦を見悟された智慧によって，世尊は苦海に沈む衆生を解脱へ，悟りへと導びかれる。そのような衆生にとって，慈悲と智慧による実践活動をされる仏陀はまさに量となる。このようにして本章では法称の道論が展開されている。[12]

註

（1） tāyāt tattvasthirāśeṣaviśeṣajñānasādhanam //
bodhārthatvād gamer bāhyaśaikṣāśaikṣādhikastataḥ /
(skyob-las de-ñid daṅ brtan daṅ / ma-lus khyad-par mkhyen-par grub / gśegs-pa rtogs-paḥi don phyir te / de phyir phyi-rol-pa daṅ slob /) (Kārikā 281b, 282a)
尚，gamer gataśabdaḥ prakṛtiḥ / (Vṛtti 106, 20) 参照。語根は，文典において gamer iṭ parasmaipadeṣu (Pāṇinisūtra 7, 2, 58) などと表現される。

（2） Bhāṣya 164, 25–29 T 153b, 2–5

（3） Pramāṇasamuccaya-Vṛtti T 14b, 4–5

（4） Bhāṣya 164, 22 T 153b, 2

（5） parārthajñānaghaṭanaṃ tasmāt tacchāsanaṃ dayā //
tataḥ parārthatantratvaṃ siddhārhasyāvirāmataḥ /
(gźan don mkhyen sbyor de ston-pa / de-las brtse yin gźan don ṅor / don grub mdsad-pa mi ḥdor phyir /) (Kārikā 282b, 283a)

(6) Vṛtti 107, 18–19

(7) dayayā śreya ācaṣṭe jñānāt satyaṃ sasādhanam //
taccābhiyogavān vaktuṃ yatas tasmāt pramāṇatā /
brtse-bas legs daṅ ye-śes-las / bden-pa gsuṅ mdsad sgrub-byeb-bcas / de gsuṅ-bar yaṅ sbyor-ldan / gaṅ phyir des-na tshad-ma-ñid /) (Kārika 283b, 284a)
この解釈については次の諸註を参照。
dayayā jagaddhitaiṣitvena (Vṛtti 107, 23)
jñānāt sugatatvāt (Vītti 107, 27)
sasādhanam……vidyamānaśāstṛtvam ityarthaḥ / (Vṛtti 107, 27–28)
de gsuṅ-bar ni mṅon-sbyor-ldan śes-bya-bas ni skyob-pa-ñid-du bston to / (Pañjikā T 121a, 4)

(8) upadeśatathābhāvastutis tadupadeśataḥ //
pramāṇatattvasiddhyartham anumāne' pyavāraṇāt
(de-ltaḥi dṅos don bstod-pa ni / de-yi bstan-pa-ñid ni / tshad-maḥi de-ñid grub don de / rjes-su dpag-pa ma bzlog phyir /) (Kārikā 284b, 285a)

(9) prayogadarśanād vāsya yat kiñcid udayātmakam //
nirodhadharmakaṃ sarvaṃ tad ityādāvanekadhā /
(cuṅ-zad skye-baḥi bdag-ñid-can / gaṅ de thams-cad ḥgag chos-can / śes-sogs rnam-pa du-mar ni / ḥdi-yi sbyor-baḥaṅ mthoṅ phyir ro /)(Kārikā 285b, 286a)
尚，prayogasya parārthānumānasya……(Vṛtti 108, 18) を参照。

(10) hetor udayadharmakatvasya sādhyena nirodhadharmakatvena vyāpteḥ(Vṛtti 109, 7–8) を参照。

(11) anumānāśrayo liṅgam avinābhāvalakṣaṇam //
vyāptipradarśanād dhetoḥ sādhyenoktañca tat sphuṭam /
(med-na-mi ḥbyuṅ mtshan-ñid-can / rtags ni rjes-dpag rten yin no / bsgrub byas gtan-tshigs khyab-pa ni / bstan phyir de yaṅ gsal-bar bsad /) (Kārikā 286b, 287a)
尚，この解釈について，Bhāṣya 166, 14–17 T 155a, 2–4 を参照。

(12) チベットのダルマリンチェンは本章の内容を＜解脱道＞として把えている。＜tshad-maḥi lam khrid＞（東北目録 No. 5446）参照。尚，羽田野伯猷先生，「チベット仏教学の問題」＜文化＞第18巻第3号 67頁，74頁参照。

（東北大学大学院）